

佳作

『ハンナ・アーレント 「戦争の世紀」 を生きた政治哲学者』

矢野久美子著（中央新書・文庫 中公新書；2257）

商学部 4年 藤丸真穂

時間や日々の出来事に追われる中、私達は「思考」しているだろうか。新聞の見出し、テレビのニュース、世の中への不満は、右から左へと流れてゆくだけのものだろうか。そしてもし仮にそれらを掴み取り、対決できたとしても、それは一部の人が担う、英雄的なものなのだろうか。

政治哲学者ハンナ・アーレント(Hannah Arendt)は1906年にドイツで生まれ、マールブルク大学、そしてハイデルベルク大学にて学び博士号を取得した。その後、ドイツで起こったユダヤ人迫害から逃れるため、フランス、アメリカに亡命し、数々の著作を発表してきた。

本書ではそんなアーレントの一生を、彼女が出会った人々、その時々での彼女の著書、そして著者矢野久美子によるそれらの分析で彩り、アーレントの生涯と思想をリンクさせている。また本書は、あとがきで著者が述べているように、アーレントの思想をかみ砕いて紹介すると共に、読者一人一人が彼女の思想を受けて、それぞれの手段で世界を捉えなおすことのできるようになっている。

アーレントは「思考」や「人間が多様であること」を重視した。『全体主義の起原』において、人間の多様性を否定したことが、全体主義の悪であったのだと著者は述べている。また『人間の条件』では、なぜ多様性は実現できなかったのか、多様な人々はどのように共生できるのかという問いから『人間の条件』が成立したと述べている。そして『イェルサレムのアイヒマン』では、アーレントはアイヒマンの無思考性を分析し、普通の人間が普通でない悪を行えるということを「悪の凡庸さ」という言葉で指摘した。アーレントのこれらの問題意識は、日本のいじめ問題、韓国のセウォル号事件、そして空虚な「モノ」と「カネ」のために全てを犠牲にする今の資本主義など、世界中の問題に通ずる。

著者は本書の最後で、アーレントが度々著書の中で触れていた「はじまりが為されんために人間は創られた」というアウグスティヌスの言葉について、こう解釈している。

私たちは考えることや発言し行為することによって、自動的あるいは必然的に進んでいるかのよう
な歴史のプロセスを中断することができる。そこで新たにはじめることができる。アーレントにと
ってその「はじまり」の有無こそは、人間の尊厳にかかわっていた。(p225)

もう一度問う。私達は「思考」しているだろうか。今、世界は様々な問題を抱えている。しかしそれは単なる新聞の見出しでも、必然的に進んでいるものでもなく、紛れもない今私達が生きている世界で起きていることである。

本書は、自分は普通の人間で、これからも普通に生きていこうという人に、ぜひ一読してほしい一冊である。また、地球上の何もかもが商品となり、また大学が本来の意味を失いブランド化し、職業訓練校のような状態になりつつある今この時代こそ、本書のような「思考」の重要性を説く書籍は重要になってくるであろう。